南の島に雪が降る

戦後七十年特別企画 前進座公演

死線をさまよう兵士たち、
生きる希望は…芝居！
命がけで芝居を創り、命がけで芝居を見た、
嘘のような本当の話―

加東大介＝原作　瀬戸口郁＝脚本　西川信廣＝演出　加藤武＝協力

絵
スタジオジブリ
近藤勝也

2015年10月20日(火) 静岡市清水文化会館マリナート

JR清水駅 みなと口（東口）下車徒歩３分　清水駅自由通路直結

開演 14時（開場13時30分）　【ご観劇料金】一般 5,000円・学生 3,000円（全席自由席）

主催：前進座『南の島に雪が降る』静岡公演をみる会　■お問い合せ：054-287-1293 静岡県評

後 援：静岡市・静岡市教育委員会・静岡県遺族会・静岡新聞社・静岡放送・静岡朝日テレビ・静岡第一テレビ
毎日新聞静岡支局・朝日新聞静岡総局・テレビ静岡・読売新聞静岡支局・中日新聞東海本社

加東大介＝原作（光文社知恵の森文庫刊）

南の島に雪が降る

戦後70年―。あの戦争の記憶がだんだんと風化し、今また、この国の平和な未来に不安を覚えるような、きな臭いニュースが聞こえてきます。いったいこの国はどこに向かっているのか…。戦後70年にあたり、戦争のむごさ、人の命の尊さ、そして演劇や音楽など文化芸術が絶望の淵にある人々に何ができるのかを今一度見つめ直したい―そんな想いを込めた特別企画『南の島に雪が降る』は、戦前、前進座の俳優として活躍された加東大介さんが、過酷な西部ニューギニアで実際に体験された、悲しくも可笑しい、地獄に灯った一筋のあかりの物語です。

【ものがたり】

昭和18年、大阪中座の舞台に出演中の前進座俳優・市川莚司（後の加東大介）のもとに、召集令状が届く。再び舞台には立てないかもしれない、そんな覚悟で向かった先は戦況厳しい西部ニューギニアのマノクワリ。本土からの食糧も尽き、マラリアなど疫病でばたばたと仲間の兵隊たちが亡くなっていく日々…。ところが、そのマノクワリでは、彼の舞台を知る演劇評論家・長唄の三味線弾き・スペイン舞踊の教師・脚本家・カツラ屋・友禅職人・喜劇俳優といった面々との奇跡的な出会いが待っていた。やがて、彼を中心に演芸分隊が立ち上げられる。何もないところから、涙ぐましい努力と工夫で、衣裳や鬘や小道具が作られる。そしてなんとマノクワリ歌舞伎座という劇場までもが建てられ、懐かしい故郷の風景や、若い兵隊扮する女形の白い肌に母や女房を想い出しては熱狂する、死と隣り合わせの兵隊たちが、毎日押し寄せて…。

瀬戸口郁＝脚本
西川信廣＝演出
加藤武＝協力
佐藤琢人＝装置
桜井真澄＝照明
上田亨＝音楽

中嶋宏太郎

嵐芳三郎

写真提供：東宝

加東大介

俳優　本名、加藤徳之助　明治44年浅草生まれ
沢村国太郎、沢村貞子の弟。東京府立七中を経て、昭和4年に二代目市川左団次の門に入り、市川莚司（いちかわえんし）を名乗る。昭和8年前進座に入座。18年、衛生伍長として応召、21年に復員。戦後は『七人の侍』『羅生門』など舞台、映画、テレビで活躍した。1952、1955年と2度のブルーリボン助演男優賞受賞。昭和50年没。

沢田冬樹（文学座）

松浦海之介

本村祐樹

忠村臣弥

新村宗二郎

藤井偉策

上滝啓太郎

早瀬栄之丞

松涛喜八郎

姉川新之輔

益城宏

山崎辰三郎

藤川矢之輔

前進座の『南の島に雪が降る』に期待する

高畑　勲（アニメーション映画監督）

加東大介さんの原作『南の島に雪が降る』は、一読驚嘆せざるを得ない本です。戦わずして大量の餓死者を出した、悲惨極まりない西部ニューギニア戦線。いつ敵が襲ってくるかもしれず、極度の緊張を常に強いられ、飢えと病に苦しみ、次々と死んでいく兵士。そんな彼らの心を癒し、支え、晴らしてくれるものとして、演芸やお芝居というものがどんなに大きな存在足りえたのか。役者だけでなく、化粧・衣裳・舞台装置・照明などに発揮された演芸分隊員たちの職人根性、打ち込みようがどれほどスゴイものだったのか。米国の強制収容所内などで発揮された驚くべき芸術行為などとともに、日本人論には欠かせない基礎文献のひとつでしょう。

このたび『南の島に雪が降る』が加東さんの出発点だった前進座によって演じられると聞き、大いなる期待とともにいささかの不安が私の胸をよぎりました。それは、この作品が面白すぎるからです。劇中で心打つエピソードが繰り広げられ、悲しみや笑いがあふれ、ヒューマニズムが示されれば示されるほど、戦下でもこんなにも人間はいとおしく、悲しくも美しいのだ、という心地よい感動ドラマに終わってしまいかねない。それがいかなる極限状態で行われているのか、日本軍が行った戦争が、自軍の兵士に対してさえ、いかに残虐非道なものであったのか、芝居に熱中し笑っている兵士一人一人が、日頃いかに厳しい生活を強いられているのか、それこそがひしひしと若い観客に伝わらなければ、今この名作を取り上げる意味はないのではないか。

前進座ならば、そこをしっかりと感じさせてくれるにちがいないと思い、大いに期待しているところです。

戦後70年特別企画『南の島に雪が降る』静岡公演に賛同します（50音順・第一次）

阿部浩基（弁護士）・植松真樹（弁護士）・大多和暁（弁護士）・大橋昭夫（弁護士）・佐藤博明（元静岡大学学長）
中澤秀一（静岡県立大学短期大学部准教授）・西ヶ谷知成（弁護士）・原田唯司（静岡大学大学院教授）・望月正人（弁護士）
全日本年金者組合静岡県本部・静岡県労働組合評議会・清水民商・静岡県生活と健康を守る会連合会

常に忙しく、こころから仕事を愛し、映画、舞台、テレビで役を演じ続けた父、加東大介。その父は65歳で人生の幕を降ろすが、息子であるぼくに伝えたかったこと。戦争で幸せになる人は、ひとりもいない。いかなる理由であっても、戦争はやってはいけない。それがこの「南の島に雪が降る」にあると、ぼくは思っています。

加藤　晴之（ちくま文庫「南の島に雪が降る」付記より抜粋）